

# 小学校英語活動における 国際理解教育のカリキュラム

坂本 ひとみ

## 要 旨

いよいよ小学校の高学年において、週1回程度の英語活動が必修となることが確実になってきました。今まで小学校の英語はネイティブの先生に丸投げにされ、歌やゲームばかりという批判もありました。必修化するのであれば、適切な目標にねらいを定めた体系的なカリキュラムが是非とも必要となるでしょう。小学校・中学校の連携だけでなく、できることなら高校・大学まで首尾一貫した教育目標をすべての段階の教師が意識し、系統だったカリキュラムが作れたら理想的でしょう。

小学校英語は楽しいだけでなく、国際理解教育のテーマ別学習を取り入れることによって、高学年の子どもたちに知的な刺激を与えることもできる「楽しく深い」授業にすることができると 생각합니다。この論考ではそのような小学校英語活動のカリキュラムを考えてみたいと思います。

## 1. はじめに

2007年8月30日、文部科学省は、学習指導要領改訂の基本的な考え方と小学校の教育課程の枠組み素案を、中央教育審議会（文科相の諮問機関）の教育課程部会と小学校部会にそれぞれ示しました。小学校では、主要4教科（国語、社会、算数、理科）と体育の授業時間を1割増やし、高学年で「英語（外国語）活動」を週1コマ（45分）程度設け、現行指導要領から導入された「総合的な学習の時間」（総合学習）は現行週3コマであったのを週1コマ程度減らすという内容です。年間の総授業時間を低学年で70時間、中高学年で35時間程度増やすことになり、小学校においては30年ぶりの授業時間増となります。小学校の授業時間は1977年には4339時間であったのが、「ゆとり教育」をめざして、1998年には4025時間になっていました。それが今回の素案では、4235時間とされています。この案は、中央教育審議会の専門部会で大筋で了承され、文部科学省は今年度中に改定される学習指導要領に反映させる方針といわれています。が、教科書作成に時間がかかるため、実施は早くても2011年度になるということです。

増加する時間分の確保には、総合学習の削減分のほか、夏休みなど長期休業の短縮、多くの学校で行われている朝の10分間読書の時間などを学校現場の状況に応じて活用するよう求めています。

この素案においては、現行指導要領にも盛り込まれている、自ら学び自ら考える力の育成をするという「生きる力」の重要性が強調されています。そのうえで素案は、「生きる力の（育成の）観点から

(前回改定は) 授業時間を削減した。しかし、基礎的な知識の習得と知識の活用を行うためには、現在の小中の必修教科の授業時間は十分ではない」と授業時間を増やす理由を説明しています。

英語活動は、高学年に週1コマ程度(年35時間程度)を課しています。「小学校段階にふさわしい国際理解やコミュニケーションなどの活動を通じて、言葉への自覚を促し、幅広い言語力や国際感覚の基盤を培うことを目的とする」とされています。小学校での英語は、中央教育審議会の外国語専門部会が2006年3月に必修化を提言しました。が、9月に就任した伊吹文部科学大臣は「美しい日本語ができないのに外国の言葉をやってもだめだ」という否定的な見解を繰り返してきました。が、その伊吹大臣も翌年8月27日の留任会見で「国際化時代に外国の雰囲気や言葉に触れるのを否定しているわけではない」と態度を軟化させています。文部科学省は、小学校英語は中学英語の前倒しではない活動と位置づけ、専門部会の上を承認しました。すでに90%以上の公立小で実施しており、その大半が総合学習を利用している現状を承認した形といえるでしょう。ベネッセコーポレーションが2006年の夏、公立小の教務主任3503人から回答を得た調査では、何らかの形で英語教育を行っている小学校は94%に上りました。が、92.7%が「教材の開発や準備のための時間」が「十分ではない」と答え、「教員の英語力」についても81.8%が「十分ではない」と答えているところを見ると、英語必修化に対する現場の不安というものも無視するわけにはいかないと思います。朝日新聞の問いかけに対し、都内の公立小のある教諭は「不安である。何を教えることになるのか。」と話し、「小学生で学ぶ意味は、英語に耳が慣れることだと思うが、私の発音でいいのかと思ってしまう。」と漏らしたということです。

小学校での英語必修化は長い道のりを辿りましたが、政府が先導した英語教育導入からは約15年が経過しており、研究開発校や英語特区の指定を受けた学校がある一方、年間で英語をやる時間は3時間くらい、という小学校もあるという学校間格差が問題になってきていました。今回の高学年における英語必修化は、この問題に対しての一つの解決策といえるかもしれません。

しかし、小学校で英語が必修になるのであれば、いくら中学英語の前倒しでないとはいっても、小・中の連携ということも考えないわけにはいかないでしょう。今や、日本の英語教育の体系的なカリキュラムというものが求められているのではないのでしょうか。この論考において、その問題に対する何らかの展望を探ってみたいと思います。

## 2. カリキュラムとは

「カリキュラム」の語源は、ラテン語の *currere* (to run) であるとされています。「走る」→「競争路」→「学習の履歴」→「学習経験」と展開され、最近では、カリキュラムを「学習経験の総体」とみなす広義の考え方が主流となっています。つまり子どもが学びとっている内容すべてがカリキュラムというわけです。そのように考えると、教育内容は教科書や教材プログラムとして教室の外から与えられるものではなく、「教室における教師と子どもたちの活動によって媒介されたコミュニケーションによって構成されるもの」<sup>(1)</sup> としてとらえられます。

カリキュラムを、学習指導要領のような制度的、公的な枠組みであるとか紙の上に書かれた教育課程表であるとか、イギリスのナショナル・カリキュラムのように国家的な教育内容基準であるとかとら

えると、カリキュラムはスタティックなものにとらえられ、カリキュラムを「創る」という発想は出てきません。しかし、学ぶ主体である一人一人の子ども、学びの場を創造する一人一人の教師という視点に立ってカリキュラムを考えると、もっとダイナミックでオリジナルでクリエイティブなカリキュラムを自ら創り出していく可能性が見えてきます。

日本の教育は、上で作られたカリキュラムをトップダウン式に全国一律に普及させていくことに慣れすぎてしまっています。が、経済協力開発機構(OECD: Organization for Economic Cooperation and Development)の教育研究革新センター(CERI: Center for Educational Research and Innovation)は1970年代から「学校に基礎を置くカリキュラム開発」(SBCD: School-Based Curriculum Development)という考えを提唱しています。それから時を経て、2002年度から日本の学校においても「総合的な学習の時間」がスタートし、それぞれの学校の実態に即した教育内容や目標を定めてよいこととなりました。そして、その中の選択肢の一つである国際理解という分野の中で外国語を教えることもよいということになりました。上位下達式の学習指導要領に慣れすぎてしまっている学校教育現場では、何を教えたらいいいのかわからないという戸惑いの声も大いに上がりました。が、そういう中から、試行錯誤を重ねつつ、各学校独自の総合学習のプラン、英語活動の体制が徐々に作り上げられてきています。近い将来、小学校英語が必修になったとしても、今までこのように積み上げられてきた経験が決して軽視されることなく、うまく活かされていくよう考えていかなくてはいけないと思います。千葉県流山市や柏市の小学校における先生方の実践報告会、研究成果分析報告会に参加させていただくたびに、そういう思いを強くしています。

### 3. 現場に即したカリキュラムを創ることの重要性

今回出された素案の中でも、教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続などの観点から、国として各学校において共通に指導する内容を示すことが必要である、とされています。現在、各小学校における取り組みに相当なばらつきがあることが問題視されているため、このような考えが出てくることも当然であるとはいえるでしょう。しかし、外国語専門部会で何度も話し合いが持たれてきたなかで、国際コミュニケーション力を重視する方向と、スキルとしての英語力育成を重視する方向のどちらをとるかという議論がつくされてきた結果、国際コミュニケーション力重視の線で決着したと報告されているわけで、そうなると、それほど共通した内容を設定できるのかという疑問がわいてきます。コミュニケーション力の育成ということを考えた場合、英語のスキルだけでなく、異文化を受容する態度、世界の状況に対する知識などもバランスよく育てることが重要であり、英語力の到達目標だけを示せばよいということではないと思います。国から出された一定の基準を片方でにらみながら、各学校独自のカリキュラムを近隣の小・中学校と連携をとりつつ創っていくというやり方も大いに奨励したいと考えます。それは、何よりも各小学校現場の子どもたちのニーズというものがきちんと把握されたうえで、学ぶ主体である子どもを中心に考えたカリキュラムが創られることが大事だからです。

デヴィッド・ポール氏は、著書『子ども中心ではじめる英語レッスン』のなかで、次の4つの目標

をかがけています<sup>(2)</sup>。

- ① 子どもが英語でコミュニケーションする喜びを感じられること
- ② 子どもが英語についてポジティブな感じを抱くこと
- ③ 子どもが英語のしくみについて深く理解すること
- ④ 子どもが自分に対して自信を持ち、自ら学び続ける意欲をもった積極的な学習者に育つこと

まず①についてですが、この目標を達成するためには、英語のクラスにおいても子どもが心から感じていることを表現させるべきであるとポールは指摘しています。今までの日本の英語クラスでは、与えられた文型を丸暗記するだけのドリルばかり繰り返してきた傾向があると思います。が、これでは、英語のパターンを自分で感じ取って自分のものとするセンスが身につかないのです。子どもは自分に関係のないことには興味を持ちませんから、ただの英語文型ドリルのために“John likes bananas.”ということは何度も言わせたとしても、この John という人間を知らないのであれば、この英文は生きた言葉として子どものなかには入っていきません。自分にとっての真実を英語で表現させる、たとえば、“I like my dog very much, and my dog likes me, too.”というような内容であれば、3人称の“s”の練習だとしても、ずっと違った意味をもって子どもの頭と心に残っていくのです。

②については、子どもが楽しく学べること、クラス内のみんなが快適に過ごすこと、先生との関係も良好であることが大事だとしています。そして、学ぶことと楽しいことが同じコインの裏と表であるように子どもに感じられるべきであるから、ゲームはゲーム、勉強は勉強と区切るのはいいやり方とはいえないという指摘も重要だと思います。えてして、子どもの英語クラスでは、お勉強をちゃんとしたら、ごほうびとしてゲームをしましょう、という組み立てになっていることがありますが、子どもが探求しながら学んでいくサイクルというものを熟知している教師であるなら、子どもにゲームをさせながらも、新しいボキャブラリー、新しい文型を子どもに発見させていくことが可能なのです。子どもが自分で気づき、発見し、挑戦して成功することを繰り返し、自分の英語が上達しているという感じを子どもが抱ければ、英語に対してもずっとポジティブな気持ちを保つことができるでしょう。

③についても、上で述べた子どもの学びのサイクルというものが鍵となります。teacher-centred な方法で知識をつめこむ教え方では、子どもの頭のなかに英語の構造を深く理解するというプロセスは生じてきません。子どもの学びのサイクルに着目した学びの場を創造してやれば、子どもたちは大人が思う以上にたくさんのことを自ら発見し、新しい知識を今まで自分の頭のなかに構築してきたシステムの中にうまくあてはめ、多くの語彙や文型を使えるようになっていくのです。

④については、家庭においても、親が子どもを励ましてあげることが大切であり、子どもが自分一人で本を読むことや英語を口にするのを大いにほめてバックアップし、子どもが学び始めたときに目を輝かせていた、その目の輝きが続くことが何より大事であると指摘しています。

トップダウンで上から与えられるカリキュラムは、どうしても教師が子どもに何かを教えるというスタンスがベースとなって創られる傾向がありますから、小学校の教育現場においては、意識して、上にあげたような子ども中心の学びを大事にする視点を入れつつ、教師と子どもと家庭と地域が連携しながら現場に即した具体的なカリキュラムを創りあげていくことを行ったほうがいいと思うので

す。

## 4. テーマ別学習

国際理解教育を「言葉の学習」に取り入れる場合、テーマ別学習をすることで、多様な内容を系統立てて取り入れることができます。テーマ別学習では、一つのテーマを切り口に様々な活動や問いかけが用意され、生徒の知的好奇心を刺激しながら授業が進められます。教師が知識・技術を生徒に一方的に教え込むのではなく、生徒が既に持っている知識や体験、興味を様々な角度から引き出していきます。教師と学習者が共に尊重しあいながら、「学び」を深め広げていくのです。したがって、生徒一人一人がリソース・パーソンとして、学習過程に貢献することが期待されます。

テーマ別学習はもともとニュージーランドで始められた学習方法ですが、これまで、アメリカ・イギリス・オーストラリアなど移民の多い国で発達してきました。当初は、移民の子どもが英語を学ぶのに、英語の言葉だけ切り離して教えるのではなく、その子どもが興味を持ちそうな題材を選び、その題材について様々な視点から教科横断型で英語を使って学ぶことによって、言語運用力をつけようとするものでした。

その後、これらの国々では、移民の子どもばかりではなく、英語を第一言語とする子どもたちをも対象に、この学習方法が採用されるようになりました。「ホールランゲージ」という教育理念として、言葉の社会的背景や言葉の本来の意味、及びその背後にある文化・社会的側面を重視して研究・実践が進められてきています。識字率を上げるのに大変成果があったことが報告されており、とくに初等教育において画期的な教育方法であるとして注目を集めてきました。

オーストラリアでも、詰め込み型の教育が行き詰ったときに、科目で断片化していることがよくないということで、このテーマ別総合学習が取り入れられ、勉強嫌いになってきた子どもたちに対して大いに効果があったそうです。

ここでは、国際理解教育にふさわしいテーマを、国際理解教育の5つの柱である(1)環境教育(2)人権教育(3)平和教育(4)異文化間コミュニケーション教育(5)地域・国別研究のそれぞれの分野から選び、そのテーマに沿って教師と生徒がともに学びあい、英語の世界と一緒に体験していく授業を提案したいと思います。

環境教育においては、人間の営みが、地球環境・人間・その他の生物の存続を脅かしたり、負担をかけすぎたりしないように、配慮して生活できる人に育っていくことを助けるのが主な目標といえます。地球と自分、未来と自分とのつながりを見つめ、持続可能な社会を創造するために、自らの行動を見直し変えていくことが求められます。そのためには、現在明らかになっている環境関連の諸問題について興味、関心を深め、冷静な態度で理解を深め、自己の行動を決定していくことが重要です。学んだことは、自分で実践するだけでなく、他の人に伝えたり話し合ったりといったコミュニケーションを効果的に行うのにも役立ちます。身につけるべき姿勢としては、興味、責任、公正さ、知識としては、地球環境、生態系、人間社会と自然の関係、技能としては、判断力、洞察力、調査力、想像力、問題解決力などを育てることができるでしょう。テーマの例としては、ゴミ問題、絶滅の危機に瀕す



る動物たち、熱帯雨林、恐竜、トイレットペーパーなどがあげられます。私は、アメリカ先住民の研究をしてきましたので、「七代先の子孫にとって、この地球環境がいいものでありますように」と考えながら生きてきたという彼らのことを自分の英語授業に取り入れてみたいと考えています。“Buffalo Woman”という絵本を使えば、バッファローも人間も同じ地球上の動物であり、親戚のようにつながっているものなのだ、というメッセージを伝えることができると思います。

人権教育は、「多様な文化が存在し、人々が相互に依存し合う世界で、責任ある生き方をする」のに必要な資質を育てようという国際理解教育の理念に根ざしたものでなくてはなりません。ありのままの自分を肯定的な気持ちで受け入れ、また、他者に対しては、思いやりをもって理解しようとする姿勢で接することができる力。そして、すべての人に平等に尊厳を保って生きていく権利が保障されている社会、そのような社会の実現に貢献できる力を伸ばしていく学習が望まれます。実践にあたっては、理念ばかりが先立って、学習内容が具体性に欠けてしまわないような配慮が必要です。学習者にとって身近な話題や、時事性にとんだ題材を取り上げます。学習者が自分の身に引き付けて考えられる話題を、年齢と生活および学習環境に合わせて選ぶことが大切だと思います。

そして、一人一人が過去の体験と新しく学ぶ知識をすり合わせながら、心と頭の両面で人権擁護に必要な力を身につけ、必要に応じて行動できるよう支援していきたいと思います。身につけるべき姿勢としては、自己尊重感・肯定感、思いやり、寛大さ、公平さ、知識としては、人権に関連する法律、諸問題、対立解決法、歴史、技能としては、assertiveな話し方・態度、情報収集、コミュニケーション、判断力、想像力、批判力、問題解決力があげられます。テーマの例としては、人間の五感、子どもの人権、性差別、先住民の人々などがあります。私は、カナダの海外文化演習の引率でウィニペグ大学に行ったとき、ウィニペグで実際に起きた先住民の母子の差別のドキュメンタリー映画を見せていただき、涙がとまらないほどの感動をしました。一緒にいた学生の多くも泣いていましたが、その差別の結果の解決法は、いじめた高校生をその母子の家に1週間ホームステイさせることでした。それによって、両者がお互いを理解するようになり、笑顔で解決することができたのです。このテーマは次の平和教育とも重なってくるものでしょう。

国際理解教育でめざす「平和」は、戦争・紛争や暴力のない状態だけではありません。世界中のすべての人が平等に地球からの恩恵を受け、自らの責任と関係なく命を奪われたり、心身を傷つけられたりすることのない状態が、「平和」の条件といえます。国・国際社会における政治的・社会的動向に見る「平和」、貧困、人口、食料、及び環境問題における先進国と開発途上国との構造的な不均衡によって「平和」を崩す対立・紛争、あるいは、個人の日々の生活に生じる様々なめんど。そうした問題に対して、積極的に自分で解決・改善していく力を育てることが大切なのです。子どもたちにとって身近な物や出来事を切り口として、自分にひきつけて考えることを促します。また、自分（たち）の問題として考えるだけでなく、より大きな枠組みで問題を考察するきっかけとなるような活動を織り込んでいきます。例えば、身近な食べ物をテーマに、生産者と消費者との不平等な関係、その背後に存在する経済構造などに関して理解を深めながら、世界のあり方や自分の立場を変えていこうとする授業ができるでしょう。身につけるべき姿勢としては、共感、公正さ、冷静さ、非暴力、セルフ・エ

スティーム、知識としては、歴史(過去の出来事・戦争・抑圧)、特殊性、技能としては、コミュニケーション力、判断力、計画力、対立・問題解決力、想像力、創造力、批判力、交渉能力などがあげられます。テーマの例としては、地雷、難民、いじめなどがあると思います。バナナをテーマにして、その値段を考えることから、身近な食べ物が生産・加工・貿易・流通、店頭に並ぶまでの過程における相互依存や、生産者の暮らしに興味を持ち、消費者と生産者、北と南の関係について理解を深めることもできます。

私は、1991年の湾岸戦争が起きたときに平和的な解決を訴えたアイオワ平和教育研究所の所長を単独でビデオ取材し、ケーブルテレビの番組を作り上げたことがあります。そこで見たビデオが、学校でもめごとが起きたときに、紛争解決の役目をするオレンジ色のTシャツを着た子どもがやってきて、双方の話をじっくり聞いて解決していくというもので、これもまた私が扱っていきたいテーマの一つです。

異文化間コミュニケーション、異文化理解のための教育といえは、文化が異なるために生ずる様々な違いに焦点があてられたり、逆に文化が異なっても基本は変わらないからと、「同じ」面ばかりが強調されたりする傾向がこれまでありました。異文化を知ることによって、先入観や既成概念(ステレオタイプ)が増長されたり否定的な姿勢をとるようになったり、あるいはしばしば起こることですが、「ああ、自分は日本人でよかった、日本に住んでいてよかった!」という感想を持つだけでは、真のコミュニケーションを身につけることにはなりません。授業では、人間は誰しも個性をもった存在で共通点もあれば異なる点もあること、多様な人々が存在することで集団として社会が豊かになることを実感できる体験を重ねていくことが大切です。自分と異なる文化の人々や社会・集団に対し、尊敬の気持ちをもってつきあおうとする姿勢を身につけます。また、表面的な「違い」を突き抜けたところに存在する「普遍性」や「同時性」を教材に反映させることによって、「コミュニケーション」の楽しさや可能性を実感できるようになるでしょう。異なるものに対しては、単に理解・受容に努めるだけでなく、自己のありかた、あるいは自分の属する社会の慣習・文化・人間関係・社会機構・制度などを見直すよい機会と受け止め、「違い」を新たな可能性と捉えて、そこから積極的に学ぶことができるようになることをめざしたいものです。身につけたい姿勢としては、受容、寛大さ、公平さ、好奇心、興味・関心、共感、思いやり、謙虚さ、知識としては、多様な文化・言語・習慣、コミュニケーションのあり方、技能としては、コミュニケーション力(言語、非言語)、判断力、分析力、洞察力、交渉力、問題解決力、客観的思考、情報処理、想像力などがあげられます。テーマの例としては、他の国から来た人々、様々な言語、人々の住居、道いろいろなどがあります。もし、子どもたちにとってもっとも身近な場所である「学校」をこの視点からとりあげるとしたら、外国の学校の様子を6大陸から一つずつ例をあげて紹介し、自分は学校で何を学びたいのか、どんな学校にしたいのか、学校の意義と可能性を異文化に学びながら探っていくことができるでしょう。子どもたちの想像力を育てる活動として、フォトランゲージというテクニックがあります。外国の学校で学ぶ子どもたちの写真を見せて、“What do you imagine?” “What do you want to ask them?” などという問いかけをし、6枚を見比べて、どこの学校の様子に一番興味を持ったか選ばせ、その理由を発表させたりする

こともできるでしょう。

地域・国別研究という分野では、具体的な国や地域を国際理解教育の枠組みで取り上げます。これまで異文化・異民族の紹介というと、特に英語教育では、欧米諸国やその人々のことに偏りがちでした。とりわけ、児童対象の英語学習では、英語を母国語とする国々の行事を取り入れたパーティー、歌、チャンツ、ゲーム、遊びなどを中心に持ってくるが多かったと思います。が、国際理解教育であるからには、世界7大陸を念頭に地理的にバランスのとれた学習ができるよう、国・地域の選択に配慮をしなければいけないでしょう。また、特定の国・地域に関して、地理的な確認から始まり、生徒の興味を引き出しながら、見知らぬ土地や人々の暮らしについて自然に学習意欲を喚起するような工夫が求められます。そのためには、単に地理的事実・産業などの紹介にとどまってはならないでしょう。その国ごと・地域ごとのユニークさや、暮らしぶりや生き方に関して、生徒の選択肢を広げるために参考になるような事例を取り上げます。また、生徒がその国・地域をはじめ世界に対して持っていた先入観や既成概念を正すような方法で、生徒の理解を助けることが大切です。身につけさせたい姿勢としては、共感、興味、関心、公平さ、知識としては、地理、歴史、経済、人々の暮らし、技能としては、地図読解、情報資料収集、批判的客観的読解などがあげられるでしょう。

私は、アメリカ人ゲスト講師のマッコーネル先生と一緒に、2006年10月、流山市八木南小学校の6年生に対して、ネイティブ・アメリカンをテーマとした授業を実践させていただきました。そのときのレッスンプランをあげさせていただきます。これは、国別・地域別研究と環境教育の分野を組み合わせて考えてみたものです。

### 八木南小学校6年生クラス 英語授業プラン (2006)

\* 日 時 2006年10月12日 (木) 13:50~14:35

\* 授業者 Dr. Joan McConnell (マッコーネル先生)

坂本ひとみ (東洋学園大学教授)

(マッコーネル先生はアメリカのコロンビア大学大学院で  
社会言語学で博士号を取得された先生です。)

\* 授業タイトル

「国際理解のための英語—— the U.S.A. and Native Americans」

\* ねらい

- ・生徒たちが、外国からのゲストに対し、どのように自己紹介し、どのように挨拶するか学ぶ
- ・生徒たちに、英語で挨拶するときには握手とアイコンタクトが大事であることを理解してもらう
- ・アメリカからの特別ゲストと親睦を深め、ゲストの母国であるアメリカについて理解を広げる
- ・アメリカには白人や黒人、アジア系の人々などいろいろな文化の人たちが暮らしており、アメリカ・インディアン、もしくはネイティブ・アメリカンと呼ばれる先住民がいたことを学ぶ
- ・日本にもアイヌと呼ばれる先住民がいることにふれる



＊言語材料

- ＊ “I’m (name).” (for self-introduction)
- ＊ “What’s your name?”
- ＊ “Nice to meet you.” “Nice to meet you, too.”
- ＊ “Where are you from?”
- ＊ “I’m from the United States of America.”
- ＊ “Where do you live?”
- ＊ “I live in Florida.”
- ＊ “What’s this?”
- ＊ “Who are they?”
- ＊ “Do you like ～?”
- ＊ “Do you know anything about Ainu people in Japan?”

＊教材

- ・世界地図，アメリカの地図
- ・Native Americans の写真カード，グッズ，ビデオ，バッファローのぬいぐるみ
- ・生徒に配るネイティブ・アメリカンの子供たちの写真コピーとアメリカの国旗の変遷を表すプリント（2人に1枚）
- ・生徒たちが書きこむ『トピック・ホイール』の紙（A3）8～9枚
- ・黒板に貼る英語の質問の紙3枚  
“What do they eat?” “What do they wear?” “What games do they play?”
- ・ネイティブ・アメリカンの伝説の紙芝居 “Buffalo Woman”，並べ替えカード

＊授業の流れ

- ・挨拶（2分）
- ・マッコーネル先生の紹介，彼女の母国アメリカの紹介，地図で場所を確認（2分）
- ・♪ London Bridge’s Falling Down の歌に合わせて子どもたちは橋をくぐり，歌の終わりでつかまった子どもにマッコーネル先生が “What’s your name?” と質問し，子どもは “I’m ～～. Nice to meet you.” と答える。マッコーネル先生は “Nice to meet you, too.” と答えてその子どもとアイコンタクトをして握手をする。（5分）
- ・ネイティブ・アメリカンの写真を数枚見せて，どんな人々か，どこの国の人かあててもらう。グッズやバッファローのぬいぐるみも見せて質問する。（2分）
- ・各ペアに写真コピーとアメリカの国旗の変遷を表したプリントを配り，それらを見て，気づいたことを2人で話し合い，次に4人で話し合う。（4分）
- ・『トピック・ホイール』の紙に，4人が分担して，書き込む。  
一人は「あなたはネイティブ・アメリカンの人々に対してどんなイメージを持っていますか？」

という質問に答える、別の一人は、「ネイティブ・アメリカンについて何か知っていることはありますか?」、もう一人は「ネイティブ・アメリカンについてどんなことが知りたいですか?」、もう一人は、「どうやったら、それを知ることができますか?」に答える。書き込みの最後に名前を書いてもらう。(8分)

- ・上の紙を集めて、坂本はまとめをし、マッコーネル先生に伝えたり、質問したりする。簡単な英語で言えるものは、その質問を書いた子どもに前へ出てきてもらい、坂本と一緒に英語でマッコーネル先生に聞いてみる。

“What do they eat?” “What do they wear?” “What games do they play?”などの質問をクラスみんなで言ってみる。(8分)

- ・ネイティブ・アメリカンの料理や祭りでのダンスの模様を撮影したビデオを見る。(5分)
- ・平原インディアンたちは、昔はバッファローをハントして主食としていたが、バッファローが絶滅の危機に瀕していることを坂本が話してから、『バッファロー・ウーマン』の紙芝居を見る(2分)
- ・紙芝居の絵を小さなカードにしたものを4人グループでストーリーに合わせて並べかえる。(2分)
- ・この紙芝居からどんなことがわかったか子どもたちに言ってもらう。(4分)

「地球上の生物はみんなつながっていて、人間だけがえらい生き物ではないこと。食べ物を食べるときはネイティブ・アメリカンの人々のように感謝して食べるようにしよう。」

- ・お別れの挨拶(1分)

”Thank you very much. See you again.”

英語教育と国際理解教育の融合は、新しい学びの場を創造する可能性を示してくれます。目指すものも明確です。上で述べた5分野にまたがるテーマ別学習を意識したトピック選びをすれば、楽しく深い英語クラスの教育が生まれると思います。今まで述べてきたことを図にまとめると以下のようになります。

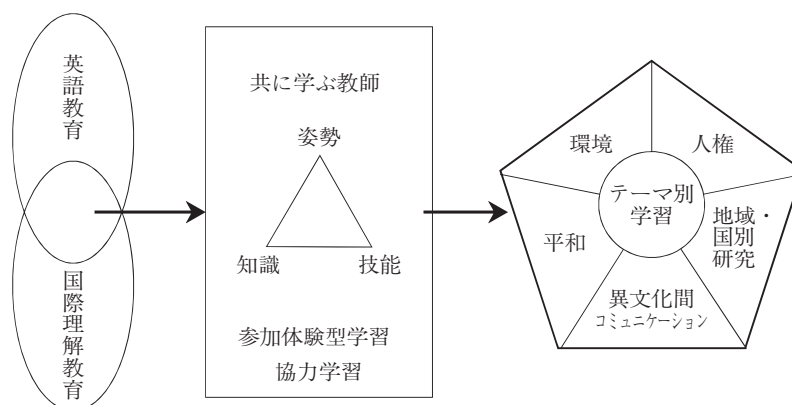


図1 『新・英語で学ぼう 国際理解教育』

グローブ・インターナショナル・ティーチャーズ・サークル編著, p.35

## 5. 年間カリキュラムの作り方

前に述べた通り、最近のカリキュラム研究においては、「カリキュラム」を「子どもが学ぶ総体」ととらえるようになってきました。以前は、カリキュラムは「教育課程」と訳され、そのようにとらえられていましたが、両者はどのように違っているのでしょうか。教育課程が、「何を教えるか」という教える側から見た計画や枠組みであるのに対して、カリキュラムは、「何を学んだか」（学びの履歴）という子どもの側に立ったものである、ということを、カリキュラム作りの基本的な視点としてもう一度確認しておきたいと思います。

前章であげたようにテーマ別学習にのっとって学習の素材を考え、それらの素材を「目の前の子どもたちの学び」と「地球社会の状況」という複眼的な視点で、順番やつながり方を考えながら構成していくことがカリキュラム作りの重要な一歩となります。目の前の子どもたちは、それぞれの学級によって異なります。また、地球社会を捉える問題意識も個々の教師で違います。もはやここからは、一人一人の教師が自分自身の持ち味を出しながら、実践を作り出していくのです。世界に一つしかない学級の子どもたちに合った、手作りのカリキュラムを創る喜び、楽しさを味わうことができるのは、自ら実践している人の特権なのです。これまでは、中央で作られたカリキュラムや教材を教えることだけに専念し、その特権を放棄していたともいえるでしょう。ただ、自分自身の持っていた固定的な考え方や見方を柔軟にしなければ、面白さは味わえません。先にあげた基本的な視点を含め、もう一度、学級の子どもたちの姿と自分自身の視点とを合わせて、具体的に振り返るところから始めたらよいと思います。

まず、「ねらい」としては、知識の獲得ではなく、態度形成、資質形成が目指されていますので、次のような事柄が関係してきます。

- ① ものの見方・考え方の鍵となる「基礎概念」をどのように押さえるか
- ② テーマとつながりを持たせながら、学習教材をどのように並べるか
- ③ どんな学習方法を用いるか
- ④ 学びの場をいかに設定するか
- ⑤ どのくらいの時間が必要か

また、態度形成と基礎知識の関係も重要であり、知識獲得がねらいではないと言っても、基礎知識の重要性は言うまでもなく必要であり、教科学習との関連も出てきます。

学習者としての子どもの実態も知っておかなくてはなりません。テーマに対しての内発的動機付けと基礎知識の習得状況、授業形態への習熟と学習教材への適応度、英語への関心、慣れなどを把握し、実態に応じたねらいや目的の設定が必要となります。学びの場の雰囲気作りや様々な環境設定を工夫するのも重要です。

英語を通した学習指導においては、それぞれのテーマや英語に関する教師自身の習熟度、教師と学習者との関係のあり方なども、カリキュラム作りに関係してきます。各学校における総合的な学習の時間の方向や位置づけも考えておかなければなりません。

つまり、「態度形成に向けての学習過程」は、教師が願いとして大切に思う価値や「ねらい」と、知識・技能・姿勢の相互関係と、目の前の子どもの実態とをもとに構想した学びの過程であり、これが年間カリキュラムの枠組みとなります。

では、実際に高学年のカリキュラム作りとして、まず枠組みから組み立ててみましょう。3、4年生でまだ総合の時間を使った国際理解教育の学習をしてこなかったケースを想定し、態度形成の最も基本的なところからカリキュラムの中に入れていきます。

まず、学びの主体としての子どもが、五感を通して自分を感じ、自分と出会う、今いる空間と出会うことからスタートします。まず「感じる」という学びの原点を重視しているのです。次に、これからの学びに必要な基礎知識を体験的な学習を踏まえて理解し、自分のものとして学び取ります。また、物事を見たり考えたりするときの自らの視点を、具体的な題材の中でつかんでいきます。教師は、子どもが「わかる」ことを支援していきます。

このように「感じる」側面と「わかる」側面を押さえた後、学級全体で一つの課題を取り上げモデルプロジェクトとしてやってみます。学び方そのものが大きく変わっていくので、高学年の子どもたちであっても、今までの学習スタイルと違った新しい課題や学び方を身につける必要があります。モデルプロジェクトといっても、教師が一方向的に押し付けるようなものではなく、教師も子どもも共に課題に立ち向かうということが大切です。一つの決まった解答があるわけではありません。子どもたちの中のいいアイデアや方法を引き出していくのです。それを、まだ気づいていなかったり、身につけていなかったりする子どもたちにも広げていき、学習への関心を深めることがこの段階では重要です。

ここまでの基本的な「感じる」側面、「わかる」側面、そして、関わり方とやり方の側面を基礎に、次は子どもたちを主体としたプロジェクト学習に入っていきます。まず、グループプロジェクト学習から入るのがよいでしょう。まだまだ学級全体を見渡したとき、全員が自立して学習が進められるとは限りません。グループの力を利用しながら、学習のやり方を深めていくのです。グループの組み方としては、一人一人が興味関心を出し合ってテーマの似たもの同士でグループを作る場合と、教師が人間関係や学習を進める力などを考慮してグループを作り、その後にテーマを決める場合があります。普段の仲間同士が集まってしまうようにすることが大切です。

この段階を経て、子どもたちの学びに対する姿勢が変わってきて、「学びの共同体」というべき雰囲気教室の中に出てくれば、「学びの履歴」として、学習者自身がその本質を自分の内部に取り込んでいくような段階に進んでいくことでしょう。

まずは、異文化理解のテーマを取り上げてみましょう。自分の日常的な判断基準の枠を超えた課題を扱った異文化理解の教材を通して、多様性の中から世界の様々なことから知る意味ももちろんありますが、同時に自分の判断の基になっているものを見直すことにもなります。この比較的思考ともいえる方法を用いて、学習者の「多様性に対する受容度」を広げていくのです。

次に、地球市民的視点をつかむテーマを取り上げます。地球的課題への主体的な関わりを模索するのです。この模索の中で、態度形成の様々な問題にぶつかりながらも、グループの関わりの中で、自

分づくり、そして、協働しあう仲間づくりを行います。特に、態度形成の過程においては、「どちらの態度が大切か」という価値についてのジレンマよりも、「わかっているけれどできない」という実践的ジレンマの方がより大きな課題になります。そこには、自分だけの問題ではなく、学級の問題、地域社会の問題、経済的な問題など、様々な課題が出てくるからです。しかし、一つ一つの問題を越えながら、より大きな自分を、そして、仲間との協働性を育てていくのです。

その意味で、最後は必ず自分自身の振り返りが必要です。小さなステップごとに振り返りを行うことで、自分を深く振り返ることができるようにしたいものです。それが学びの原動力になるからです。

上に述べた考え方をもとに、学校の教育課程に基づいて作成された高学年用の英語授業年間カリキュラムの例をあげてみます。これは、Globe International Teachers Circle という小学校の実践的な英語教育の研究会に所属している先生方が作られた試案であり、中に出てくる英文タイトルはそのサークルで作られたテーマ別学習教材のタイトルです。2002年からの学習指導要領では、年に105時間、総合的な学習の時間がとれるので、それを週に3時間ずつ配置したとして、その中の1時間を英語を入れた活動とするものです。

表1 『新・英語で学ぼう 国際理解教育』 グローブ・インターナショナル・ティーチャーズ・サークル編著、pp.54-55  
 〈英文タイトルはGITCのテーマ別学習教材による英語の授業〉

月	分野	態度形成とキーワード	時間 週	1 時間目	2 時間目	3 時間目
4月	人権	導入 出会い 私 他者	第1週			
			2	The Five Senses 1	五感ってすごい	
			3	The Five Senses 2	五感で探検	
			4	The Five Senses 3	五感と私	
5月	地域研究	世界 自然	1	The Five Senses 4	五感で交信	
			2	The Five Senses 5	五感の弱さを補う方法・体験	
			3	The Five Senses 6	五感のよさを活かして調べる	
			4	(まとめ)	発表・分かち合い	
6月	地域研究	考える視点 私 地球 世界	1	The Seven Continents 1	地球との出会い	
			2	The Seven Continents 2	各大陸を中心にした地図作り	
			3	The Seven Continents 3	大陸への旅 1	
			4	The Seven Continents 4	大陸への旅 2	
7月	地域研究	基礎知識	1	The Seven Continents 5	大陸への旅 3	
			2	The Seven Continents 6	ずっと昔の大陸—地球の歴史	
			3	(まとめ)	発表・分かち合い	
			4			
9月	異文化間理解	他者への理解と共感 関わりと交流	第1週			
			2	People from Other Countries 1	言葉を使わないアクティビティ	
			3	People from Other Countries 2	地球に住む外国の人々調べ 1	
			4	People from Other Countries 3	地球に住む外国の人々調べ 2	
10月	異文化間理解	年齢 外国	1	People from Other Countries 4	マジョリティ・マイノリティ	
			2	People from Other Countries 5	他の国からの人を迎えて	
			3	People from Other Countries 6	他の国からの人と討議	
			4	(まとめ)	発表・分かち合い	



11月	環	異文化の理解	第1週	Toilet Paper 1	うんちの旅
			2	Toilet Paper 2	私の身体と地球の環境
			3	Toilet Paper 3	世界のトイレ
			4	Toilet Paper 4	トイレットペーパーの旅調べ
12月	境	多様性から 自分を見つめ 地球環境へ	1	Toilet Paper 5	地球環境問題調べ1
			2	Toilet Paper 6	地球環境問題調べ2
			3	(まとめ)	発表・分かち合い
			4		
1月	平	地球市民的視点 からの考察 自己内省	1		
			2	Refugees 1	日本にいる難民の人々
			3	Refugees 2	難民についてのビデオ
			4	Refugees 3	難民発生国や受入国調べ1
2月	和	問題解決への 私の連帯	1	Refugees 4	難民発生国や受入国調べ2
			2	Refugees 5	難民と国の関係を討議しよう
			3	Refugees 6	世界の平和に向けて
			4	(まとめ)	発表・分かち合い
3月			1	「私と地球」各自まとめよう	
			2	「私と地球」発表しよう	
			3	振り返り	

2011年度から高学年において週1回程度の英語活動が必修になった場合、総合学習とはまったく切り離して英語のカリキュラムを組む学校も多いことと思います。が、私は、小学校の学習というのはすべての教科が相互に関連し交じり合って、子どもの頭の中に「知」の体系が徐々に総合的に組み立てられていき、その子なりの世界観が築き上げられていくように、学習が進んでいくのがいいと考えています。小学校では、各教科を別々の専門の先生が教えるのではなく、一人の先生が担任教師として（専科の科目を除く）すべての教科を教えているというのは、そういうところに意義があるからではないでしょうか。流山市小学校英語教育研究会で昭和女子大学附属小学校教頭の小泉清裕先生が講演なさったときにも、子どもにとってはすべての科目が交じり合っているのがよいのである、というお話があり、私は大いに賛同いたしました。実はこのことを明確にしたのが「総合的な学習の時間」の設定であったわけですが、縦割りの教科別学習の考え方に強く染まっている教師にとっては、これは扱いにくい時間であったようです。教師は、つねに新しいよりよい発想で子どもたちの学びをひっぱっていくことを心がけ、“Teacher development”という意識をもって、いつも自己改革をしていく勇気を持たなくてはいけないと思います。自分の目の前にいる子どもたちを可愛いと思う気持ちがあるなら、この勇気はきっと芽生えてくるものでしょう。この考えに基づいて、私は小学校の英語活動が、総合的な学習の時間で行うテーマ別学習、プロジェクト学習と結び付けられ、ほかのいろいろな科目ともクロスする内容で進められていくことを強く提案したいと思っています。

## 6. おわりに

私は小学校や保育園で訪問授業をさせていただくことはありますが、ほとんどの時間は大学生を前に授業をしている教師です。大学教師になりたてのころは目の前の学生たちがここに至るまでにどん

な教育を受けてきたのだろうか、と考える余裕はありませんでした。が、小学校英語にかかわらせていただくようになってから、一人の学生が今までに受けてきた教育のありようというものが気になるようになりました。彼らが今まで受けてきた教育とこれから受ける大学の教育が同じ目標をめざした首尾一貫したものであったなら理想的ではないでしょうか。私立の一貫校に子どもを入れればその理想は達せられるかもしれませんが、すべての家庭がそのような経済的余裕があるわけではありません。公立の小学校、中学校、高校に行ったとしても、最初の段階から大学に至るまで、一貫した教育方針がもっと明確に意識されるようになったら、日本の教育はもっと効果的なものになるのではないのでしょうか。小学校から大学に至るまでのどの段階においても、国際理解教育の視点を入れた学習が取り入れられ、前述したような5つの分野にまたがった様々なテーマに学生がいろいろな段階で何度も何度も触れられるようなスパイラル方式のカリキュラムが組み立てられたなら、「小・中の英語の連携」という議論のレベルを超えて、小・中・高・大の教育が統一性のあるものとなっていくでしょう。国際理解教育のテーマ別学習を小学校英語活動に取り入れることを提案すると、「ちょっと難しそう」と思われる先生がいらっしゃるようですが、その段階ですべてがわからなくても、その子が将来、同じテーマに違った角度から何度も何度も出会うことになるということであれば、「難しすぎる」「これでは子どもには理解できない」などという心配はなくなると思います。全部がわからなくとも、子どもの心に何かの問題提起がなされたのであればよしとして、地球市民として子どもたちも子どもたちなりに考えるべき問題を学ばせていくのがいいのではないのでしょうか。

あらゆる教育の目標を、「よい地球市民となるべく生涯学び続ける人を育てる」ということにおけば、小さい子どもから大学生、そして大人の生涯教育にまでわたって、よりより学びの方向が模索していけると思います。教育は社会を改革していく力となりえるという可能性を信じて、人を育てるという大事な仕事に真摯に取り組んでいきたいと考えています。

## 注

- (1) 佐藤学著、「カリキュラム研究と教師研究」安藤忠彦編『新版カリキュラム研究入門』，劉草書房，1999，p.177.
- (2) デイビッド・ポール著，金森強他訳『子ども中心ではじめる英語レッスン』ピアソン・エデュケーション，2004，p.187.

## 参考文献

- グローブ・インターナショナル・ティーチャーズ・サークル編著『新・英語で学ぼう国際理解教育』ベルワークス，2005.
- 松川禮子『明日の小学校英語教育を拓く』アプリコット，2004.
- 中山兼芳（編）『児童英語教育を学ぶ人のために』世界思想社，2001.
- 松川禮子・大下邦幸（編著）『小学校英語と中学校英語を結ぶ』高陵社書店，2007.
- 東野裕子・高島英幸（共著）『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店，2007.

